

第二十八回「全日本中学生水の作文コンクール」入賞作文集

# 水について考える

主催 国土交通省・都道府県

後援 文部科学省・全日本中学校長会

水の週間実行委員会

独立行政法人 水資源機構



## 「あいさつ」

国土交通大臣 冬 柴 鐵 三

地球上のすべての生命体は、水によって育まれてきました。水は人間や動植物が生きていく上で、欠かすことのできない貴重な資源です。しかし、私たちが利用することのできる水は、地球の表面を覆っている水のほんのわずかな部分に過ぎません。この貴重な水は、太陽エネルギーにより蒸発し、雲に姿を変えた後、雨や雪となって地上に降り注ぎます。そして、地表に降った雨や雪は、地中へ浸透し地下水となったり、あるいは河川の流れとなって、上流から海へと至る循環を繰り返しています。私たちは、循環の過程の中において様々な形で水を利用し、使った水を再び循環系に戻しています。この水の循環を健全な状態に保つことが、今日の私たちにとって極めて重要な課題となっています。

国土交通省は、水の重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和五十二年から「水の日」と「水の週間」を定め、様々な行事を行っており、この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和五十四年からこの行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいは両親や先生から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

今年も、第二十八回を迎え、全国（海外を含む）の中学生から一六、〇九五編（学校数三八〇校）もの応募がありました。応募された作文は、日常生活における水の貴重さや大切さを表現したもの、身近な体験から美しく豊かな水を未来に伝えていくために私たちがなすべきことを表現したものなど、水を大切にしていこうとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されており、深い感動を覚えました。このたび、入賞作品三十一編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校や家庭において「水」について考えるきっかけになるよう願っています。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、また御多忙のところ御審査をいただきました審査委員の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、御協力をいただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝を申し上げます。あいさつといたします。

平成十八年十月

## 「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日

閣 議 了 解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

## 「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することとしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の上旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

最優秀賞(一編)

(国) 土 交 通 大 臣 賞 水道水と下水の関係から学んだこと

優秀賞(四編)

(全)日本中学校長会会長賞 私に住む島の水問題 大分県津久見市立無垢島中学校二年 榎本弥奈 4

(水の週間実行委員会会長賞) 水と共に生きる 島根県美郷町立邑智中学校三年 山口明紀 6

(独立行政法人水資源機構理事賞) 水を守るために 茨城県水戸市立第五中学校一年 合志裕紹 8

(国土交通省水資源部長賞) いのちの水 静岡県不二聖心女子学院中学校二年 岸花帆里 10

入選(二十六編)

青森県黒石市立厚目内中学校三年 寺口徳一 12

山形県山形市立第十中学校三年 高橋春香 13

栃木県高根沢町立北高根沢中学校三年 加藤広佳 14

群馬県群馬大学教育学部附属中学校二年 秋葉光恵 15

埼玉県秩父市立大滝中学校三年 木下沙耶 16

千葉県いすみ市立国吉中学校二年 村田優人 17

東京都文京区立第六中学校二年 中村華子 18

神奈川県葉山町立葉山中学校二年 森川愛美 19

山梨県駿台甲府中学校二年 鶴田萌 20

長野県売木村立売木中学校三年 溝口うらら 21

三重県津市立一身田中学校三年 北川幸枝 22

滋賀県守山市立守山中学校三年 高橋渉 23

大阪府追手門学院大手前中学校一年 上田拓舞 24

和歌山県近畿大学附属和歌山中学校三年 栗山航一 25

島根県美郷町立邑智中学校三年 岡先綾子 26

岡山県苫田郡鏡野町立富中学校三年 赤木克啓 27

山口県周防大島町立大島中学校三年 藤井絢子 28

徳島県美馬市立三島中学校三年 香川千夏 29

香川県綾川町立綾南中学校一年 苧坂美里 30

愛媛県松山市立雄新中学校二年 青木さやか 31

佐賀県弘学館中学校二年 吉岡慎平 32

熊本県天草市立倉岳中学校三年 山畑まい 33

熊本県球磨村立球磨中学校二年 須惠翔吾 34

宮崎県延岡市立三川内中学校三年 日高美耶子 35

沖縄県宮古島市立佐良浜中学校二年 与那城元樹 36

ポーランドワルシャワ日本人学校二年 石上奈穂 37

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」ポスター 38

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」概要 39

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿 41

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 42

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 43

第二十八回 「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 45

最優秀賞（国土交通大臣賞）

「水道水と下水の関係から学んだこと」



神奈川県 聖園女学院中学校

三年 山 本 ひかり

「あれっ。排水量っていつも使用水量とピッタリ同じ量なんだね。」

郵便受けに入っていた水道メーターの検針票を見て、私は母に言った。今回の検針だけでなく前回の検針も、更には前年同期の検針時 Auch 排水量は水道使用水量と全く同じ数値だった。一度くらいなら偶然同じ数値になることもあるだろうが、いつも同値というのはどうも不自然な気がした。何か特別な理由があるのではないかと思っただ。母は、

「ああ、それね。水道にはメーターが付いているから水道使用量は量れるけど、下水への排水管には付いていないでしょ。だから下水使用料を請求する時、水道水を使った分だけ下水にも排水されているものと見なすの。それで同量の使用量が記されているの。」

と、教えてくれた。なんだ、そういうことだったのかと、予想に反して単純な理由に肩透かしを食らったような気分になった私は、それ以

上このことについて考えることはなかった。

それからしばらくたったある日、新聞を読んでいた父が、

「へえー、イタリアじゃ下水や川への流入水の水質調査で、麻薬の消費量まで推測しているらしいよ。」

と、その記事を見せてくれた。「下水でみえる社会の明暗」という見出しが付いたその記事には、イタリアのことだけでなく日本についても興味深い内容が載っていた。高度成長期の下水にタンパク質構成成分が増加したことは、食生活の欧米化が進み豊かになったことの表れであること。バブル崩壊後は下水への流入量が減少したが、それにもかかわらず含有有機物の濃度が高まっていないことから、人間活動そのものが停滞したと推測される。などといった記事だった。

記事を読んだ私は、自分の想像以上に、下水が私達の水の使い方、暮らし方を忠実に反映しているのだと初めて知った。一旦水道の蛇口

から出た水は様々な形で利用され、水道水とは全く異質の下水となる。その水がどれ程大切に使われた水であったとしても、また、無駄遣いされた水であっても、お構いなしにいずれは必ず下水処理場に行きつくのだ。水道水は蛇口から出た瞬間から、私達の水に対する意識と行動を見つめると言えないだろうか。そう思った時、改めてあの水道メーターの検針票について考えた。検針票の排水量は、実際、母が教えてくれたような理由で決められているのだろう。けれど私は、水道水と下水道の同じ使用量に、もっと深い意味を感じるのだ。「あなたが使った水道水は、あなたが使ったなりに姿を変えて下水となりましたよ。あなたの水の使い方はすべてお見通しですよ。」と、訴えかけているように思えてならない。

日頃私達が検針票を見る時、まず料金を気にする人がほとんどだと思う。自分がこれだけの水をどのように使ったかを省み、下水道使用量を見て、自分がこれだけの量の下水を生み出してしまったのか、と考える人が一体どれだけいるだろう。

私は料金節約を目的とすることが悪いこととは決して思わない。記事に書いてあるようにバブル崩壊後の下水量が減ったとすれば、それは不景気に対応するため、企業も家庭も節約に心掛けた成果だろう。しかし、この先もつと景気が回復し、経済的に余裕を持つようになった時、果たしてこの節水がどこまで続くか、不安が無いわけではない。

経済事情にかかわらず、水資源や環境を守るという意識に切り替える必要があると思う。それでも尚、より良い水の使い方を心掛け、努力する姿勢は失われたいと信じていたい。

新聞記事には、下水道のことを「社会を表す鏡の一つ」であると書いてあった。私達は下水を日々排出していく者として、その鏡に映し出されるメッセージを受け止め続ける義務があると、強く思った。

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

「私の住む島の水問題」

私の住む「無垢島」は大分県の南にあり、津久見の港から一日一往復だけの定期船で三十分。地図帳でみれば豊後水道にぽっかりと浮かぶ二つの島からできています。一方は断崖ばかりの無人島で沖（おき）無垢島といい、もう一つの島が私たちの住む地（じ）無垢島です。小さな平地に七十人ほどが住み、小学生五人と私たち中学生二人、小学校・中学校の先生方九人が無垢島小中学校です。島にはコンビニやお菓子屋さん、本屋さん、郵便局ありません。生活は少し不自由ですが、目の前が海、青い海が私の一番の自慢です。

ところで、新学期になり小学校に一人、中学校に一人の久しぶりの「入学式」がありました。それから、昔、無垢島に赴任なさった先生が私の担任になり、先生から三十年前の無垢島のようなすをお聞きすることがありました。

先生が赴任する半年前に電灯が一日中灯ともるようになったとか、その



大分県 津久見市立無垢島中学校

二年 榎本 弥奈

頃の小中学校の児童・生徒数は三十三人もいたこととても驚きました。でも、先生の一歩の思い出は、当時から島に水がなくてお風呂にとても苦労したそうです。私は先生の話をお聞きし、相談しながら聞き取り項目を考え、無垢島の水問題について調べてみることにしました。

島には若い人がほとんどいないので、まず、お年寄りを中心に水がなくて困ったことやこれからの無垢島についての思いを聞き取りました。私の質問に答えてもらい、その答えをメモする要領で一軒一軒、家を回ったり、道ばたで会った人に話を聞きました。私一人するのは大変で、途中から中一と小四の友だちも加勢してくれました。先生からは「がんばれ、がんばれ」と激励を受けながら四月の土曜、日曜に聞き取り調査をしました。

三十人近くの人から話を聞き、次のような結果となりました。聞き



取り項目の一つ目、「水のない無垢島でどんな節水をしているか」には、「お風呂は天水（雨水を貯めて、飲むのは不適）」とかお風呂の水は二、三日替えない、との回答が大半でした。また、私の家もそうですが、洗濯は天水にする家庭も多いようです。それから小学生の回答では、「水遊びをしない」とか。小学校の児童も島の実情をすっかりわかっているんだなあと思いました。

「水がなくて辛かった思い出は」については濁った水をすまして飲んだとか。いよいよ水がなくなったら隣にある無人島の沖無垢島に水を取りに行ったそうです。でも水はあまりなかったようです。

ところで、近年になって島と津久見を結ぶ定期船が新造され、船体の前の部分に水を積まれる貯水タンクが取り付けられ、毎日五トン島に運ばれ、私たちはその水を利用しています。でも、今も昔も無垢島では水が宝物です。

私の家でも天水をうまく活用し、一滴の水も無駄にできませんし、していません。また、学校では今年も新しく四人の先生が見えられましたが、節水対策として、「洗濯はしない」、「お風呂はシャワーで済ます」ことの二点を先生方の間ではルールにしているそうです。

なお、質問の最後の「水問題の解決策」については、「近くの保戸島からパイプを引く」とか「海水を真水に変える機械を持つてくる」とか、「ボーリングしてみる」の提案がありました。膨大な経費が必要の

ようで現実的ではないようです。近くのおばさんは「今のところ、水を大事に使うしかないです」と回答しましたが、これが一番のような気がします。

無垢島はこれから梅雨。雨がいっぱい降ればと思います。でも雨が降れば私の父はサザエやアワビ採りの漁に出れません。私の住む無垢島の水問題は本当に大変です。深刻な気がしています。今度は聞き取りの結果をもう少し私なりに分析して、将来の無垢島のあり方を皆さんに提案したいと思います。



優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

「水と共に生きる」

「誰かいねー。また手洗い場の水を流しっぱなしにしとるのは。」あきらめとも怒りともつかぬ祖父の声。

「ドキッ。」私の心臓が音をたてる。でも、知らんぷり。毎朝のようにそれがくり返される。水なんていくらでもあるから、少しくらい流しっぱなしでも大丈夫だと私はいつも思っていた。ところが祖父に、その犯人が私であることがバレてしまったのだ。祖父は、「あんなに水を流しっぱなしにしとったらもったいないだろ？」と言う。なぜ、そこまで水にこだわるのか聞いてみた。

祖父と父は、昭和四十七年にあった「四七の水害」の体験があったからだと言う。当時小学生だった父は、家を舟で脱出しなければならぬほどの大洪水のため、自分の身長くらいまでになった水の深さにとても驚いたそうだ。水道管が通っていなかった当時の水源は井戸水だったが、大洪水のため、泥や、砂、人糞などに汚染され使うことが



島根県 美郷町立邑智中学校

三年 山口 明紀

できなくなっていました。大切な飲み水を使うことができなくなってしまう祖父と父は、裏山の山水や、近くの学校の水をもらって生活していたようだ。もちろん、風呂は入れないので、近所の家の風呂を貸してもらって入っていたという。水をふんだんに使うことができないう暮らしはとても大変だったそうだ。井戸水がきれいになっても、雨が降るたび汚くなっていったそうなので、塩素を入れ、それでも汚いと井戸水をわかして使っていたのだ。そんな予想外の苦労話を聞いて、私は大変驚いた。と同時に、ひねると蛇口から出てくる水の大切さ、ありがたさに気付かされた。祖父と父は、「水は、恐ろしいものでもあるし、私たちを育て、生かしてくれるかけがえのないものなんだよ。」と話してくれた。注意をする祖父の気持ちが分かった気がした。水への感謝の気持ちだが、何十年経った今でも祖父や父の心に生きていくのだ。

祖父のこの言葉から、私自身も水に生かされてきたということを改めて感じさせられた。水は、人類が生まれるもつと前から存在し、人類が生まれてからもずっと、私たちが生かしてきてくれた。私の身近な所にも「江の川」という一級河川がある。私たちが使う生活用水や、水力発電といった多くのことにその水は使われ、日々、私たちを支えてきてくれた。そんな江の川の水を私の住む地域の人々は、大いに活用し、そのかわりに、ゴミ拾いや、節水などをして、大切にしてきている。そんな地域の人々の姿から、これこそが水に生かされ、水を生かす「水との共生」なのだと思った。

祖父や父のように私より前の世代の人々は、水を大切にして生きてきた。しかし、私のように水のむだ使いを平気とする人が私たちの世代が増えてきている。やはり、水道ができ、水まわりのことが便利な時代になったからだろう。だからといって、このままの状態にしていてはいけないと思う。私たちの世代は、水の大切さ、そして水が私たちに生きてきてくれたことに気づき、考えていくことが課題なのではないだろうか。前の世代の人たちがそうであったように、水に生かされて生きていくだけでなく、私たちが水を生かそうとする努力をしていくことが、「水との共生」につながっていくのではないかと思う。

このかけがえのない地球の中で水と共に歩んでいくためにも、私は、水に生かされていることを肌で感じ、まず、今までしてきた水の

出しっぱなしをなくすといった小さな努力から始めよう。そして、昔から受け継がれてきた水への感謝の気持ちを次の世代へとひき継ぐことができるよう、これからも「水との共生」について、考えていきたい。

水に生かされ、水を生かす。そんな水との関係を大切にして、私は水と共に生きていきたい。

そんなことを考えながら今朝も、手洗い場の蛇口を「キュツ。」と閉めた。

優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

「水を守るために」

ぼくの家では金魚を飼っている。金魚の世話は、ぼくの仕事だ。昨年、金魚の卵がふ化して、稚魚を大切に育てている。稚魚の成長を見ていると、とてもうれしい。水の中で泳ぐ金魚は、とても気持ち良さそう、ぼくも気持ち良くなる。だから三つの水そうの水かえも、ちつともめんどうではなく楽しいくらいだ。

しかし、金魚に最も適した環境を作ってあげるのが難しい。一番難しいのが水かえのタイミングで、金魚の調子が悪くなる前にしなければならぬ。でも、しょつ中水をかえすぎると、水に慣れずに調子をくずしてしまう。この四月、中学入学までいそがしく金魚からちよつと目をはなしていたら、金魚を一匹病気で死なせてしまった。水そうには、エアレーションをしたり、水草を植えたり、バクテリアを活性化させる薬を入れたり、えさの食べ残しや金魚のふんを食べるヤマトヌマエビを入れたりして、金魚が住みやすいようにしてい



茨城県 水戸市立第五中学校

一年 合志 裕 紹

る。でも、それで良いという訳ではなく、伸びすぎた水草を切ったり、食べられた水草の分を新しいものにかえたり、枯れた水草を取り除いたりしなければならぬ。ヤマトヌマエビも、金魚に食べられたりすることもある。

ぼくは、金魚を飼ってみて、水に住む生き物にとって、良い水質が、どんなに大切かということを学んだ。それに、人の手で自然の環境を整えるのは、とても難しいこと、自然界の海や川は生き物が生きるための仕組みが良くできているなあと思った。

だから、海や川へ行った時、ごみが捨ててあったり、油が浮いていたり、釣り糸が落ちていたりすると、とてもいやな気分になる。どうして、こんなことができるのだろう。自分のことだけしか考えていないのかなと思う。

この油で魚が死んでしまうかもしれないと思う。

この連休に、涸沼に行った。涸沼には、網で魚を採っている人がいた。シラウオが良く採れていた。ごみも無いし、きれいな水辺だった。だけど、すぐ側の公園には、地元の小学生が描いた『泳げる涸沼に』というポスターが、はってあった。昔はきつと涸沼は、もつともつときれいだったんだろうと思った。それから、涸沼をきれいにしようとしている人達がいるんだなあと知って、安心した。

ぼくは、油などをなるべく流さないように気をつけている。油大さじ一ぱいを、魚の住めるきれいな水にするのには、風呂おけ二十ぱいの水が必要だということを、聞いたことがあるからだ。ぼくは、美しい環境を守りたいという気持ちは、割と強いと思う。だけど、この前はとさせられたことがあった。

ぼくの家では、家族でキャンプへ行くことが多いのだが、この前行った猪苗代湖の側のキャンプ場では、合成洗剤の使用が禁止だったが、代わりに環境にやさしい粉石けんを買わされて、それを使ったのだが、泡立ちが悪く、すっきりしなかった。それに、流し水で洗えないように、水道のじゃ口を、片手で押していないと、水が出ない仕組みになっていて、すごく洗にくいし、油は紙でふき取ってから食器を洗わなければならないので、めんどうだった。

ぼくは、知らない内に、環境にやさしくないことをしていたんだなあということに気付かされた。

水は、生き物にとって、命の源だ。だから大切な水を守るために、ひとりひとりが気を付けていかなければならないし、みんなで力を合わせていかなければならないと思う。

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

「いのちの水」

ゴールデンウィーク、私は家族で八ヶ岳の麓へ行きました。富士の自宅から、朝霧高原を経て精進湖へと登っていった道は、やがて新緑の山肌を滑り落ちるように一気に下って甲府盆地へ。そして中央高速を西に向かい、緩やかな登りを走ると南アルプスや八ヶ岳が間近に迫ってきます。私は、後部座席の窓に顔をくっつけるようにして流れていく景色を見ていました。

新緑が芽吹いたばかりの森や、耕されて白っぽくなった畑、リンゴの白い花、所々つややかな緑色の波がうねっているのが見えました。それはトウモロコシ畑で、峠の畑では芽吹いたばかりだったのに、盆地の底ではすっかり太く大きくなって、風になびいて光を反射していたのです。わずか三時間ほどのドライブでしたが、標高を上り下りするたびに季節は早春から初夏までを何度も繰り返し、私は時々タイムスリップの気分を味わいました。



静岡県 不二聖心女子学院中学校

二年 岸

花帆里

でも、どこでも農家の軒先に上げられた大きなこいのぼりは見事でした。特に田植えを終え、水をたたえた田んぼ越しに見るこいのぼりは、風をはらんで生きているかのようにでした。私は嬉しい気持ちになりました。

田植えが終わった田んぼとこいのぼり。別に目新しいものではありません。でも私にとって今年のそれらは格別の意味がありました。それは母に見せられた一枚の写真がきっかけでした。

その写真には、乾いた畑の作物の根に、ペットボトルが逆さまにして立てられているのが写っていました。母は昨年の夏、外務省のODA民間モニターとして西アフリカのセネガルを視察しました。日本が援助して建てた給水塔のあるムクムク村の畑の写真でした。

セネガルでは水道は大都市にしかなくて、大多数の人々は井戸から水を汲んで生活しています。浅い井戸は砂漠化の影響を受けて枯れ始

め、何キロも離れた井戸の水を汲み運ぶために、子供たちは学校へ通うことも出来ません。野菜を育てたくても撒く水がありません。汚い水で病気になり命を落とす人がたくさにいます。この給水塔ができたことにより半径七キロに住む人々に深井戸の安全な水が給水され、鶏や牛の飼育や野菜作りもでき生活が向上したと、村中の人が晴れ着で視察の一行を歓迎したそうです。

高温で乾燥した土地に水をまいても、あつという間に蒸発してしまいます。ペットボトルは彼らが試行錯誤の末考えついた、水を無駄にしないための畑の水やりの道具でした。彼らは目の前にある水に心から感謝し、大切な水をほんのわずかも無駄にしないで日々を生活しているのです。その写真を見、母の話を聞きながら、私は体の中を電気が流れるような衝撃を受けました。水道栓をひねれば水が出てくるのは当たり前だに思っていた自分が情けなく思いました。

雨や雪は土を潤し、地中に染み込んだ水は清冽な湧き水となって再び地を潤します。そして沢山の生命を育みます。それらは私達の体の栄養となるだけでなく、美しい景色や感動へ形を変えて、私達の心を豊かにしてくれます。水は全てのもを生かすいのちの水なのだと気がつきました。

途中立ち寄った小淵沢駅に近い三分一湧水では、澄んだ冷たい水がこんこんと湧き出し、下流の村に均等に水が流れるように三角形の石

で水の流れを分け、見事に三方向に分けていました。何百年も昔から人々はいのちの水の恩恵を平等に分かち合っていたのです。

湧き水も川の水も水道から出てくる水も、みんな私達の生活を支えています。なくてはなりません。身の回りに当たり前にように水がある暮らしができる自分はとても幸せだと気がつきました。水は自然からの頂きものであると同時に、借りものに過ぎません。再び自然に戻さねばならないのです。みんなの水だからこそ大切に使わなくてはならないのだと思います。